

研究方法論としての多声的ビジュアル ・エスノグラフィーの可能性と課題

大道香織・加藤 望・権 赫虹・中坪史典
(2020年10月5日受理)

The Possibilities and Challenges of Multi-vocal Visual Ethnography as a Research Methodology

Kaori Omichi, Nozomi Kato, Quan Hehong and Fuminori Nakatsubo

Abstract: The purpose of this study is to provide an overview of how multi-vocal visual ethnography is applied in the world and to examine its possibilities and problems as a research methodology. Twenty-three academic articles using multi-vocal visual ethnography were collected and analyzed. The analysis results revealed the following: (1) multi-vocal visual ethnography is used as a tool for understanding not only the “visible,” but also the “invisible.” (2) The technique is used not only in comparative cultural research, but also as a tool for capturing different perspectives within a single culture. (3) Photographs and websites are used as cues, in addition to videos. (4) Cues consist of a variety of content. Unlike conventional ethnography, multi-vocal visual ethnography is a research methodology that has the potential to promote dialogues between researchers and people in and outside the field.

Key words: Multi-vocal Visual Ethnography, Joseph Tobin, Qualitative Research Methodology
キーワード：多声的ビジュアル・エスノグラフィー，ジョセフ・トービン，研究方法論

1. 問題と目的

1-1. 多声的ビジュアル・エスノグラフィーの特徴

近年、日本では、多声的ビジュアル・エスノグラフィーを用いた国内外の研究が幼児教育学分野を中心に紹介されている。例えば、Burke & Duncan (2015) は、日本とニュージーランドの就学前施設を対象に、幼児期の子どもの身体が社会や文化によって作り出される隠れた習慣、価値観、行動様式などの影響を受けていることを明らかにする。Hayashi & Tobin (2015) と林 (2019) は、日本の保育者が子どもたちの社会性や情緒の発達をどのように支えているのかについて、文化的信念や文化的実践に注目し、明示的なもの、暗黙的なもの、言葉に表せないものなど実践の様子を可視化して示している。

多声的ビジュアル・エスノグラフィーとは、文化人類学者ジョセフ・トービン氏 (Joseph Tobin) によ

て開発された研究方法論であり、これを用いた研究成果として出版された“Preschool in Three Cultures” (Tobin, Wu & Davidson, 1989) や、その続編である“Preschool in Three Cultures Revisited” (Tobin, Hsueh & Karasawa, 2009) が有名である。この研究は、日本、米国、中国の就学前施設における「典型的な一日」(typical day) の映像を作成し、それを視聴した保育者の語りを収集することで、それぞれの国の文化を映し出した幼児教育の営みを検討したものである。

多声的ビジュアル・エスノグラフィーの特徴について、日本では、次の指摘がなされている。例えば、野口 (2007) は、教師が子どもとかわる際の間 (ま)、テンポ、タイミング、表情、立ち位置など、言語化や明示化が難しい無意識の行為や、暗黙的で身体的な知を捉える上で有効であることを指摘する。野澤・井庭・天野・若林・宮田・秋田 (2018) は、熟達者 (expert) が有する実践に関する知性など、実践知を検討するた

めの代表的な手法の一つであることを指摘する。このように多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、内面化され可視化されにくいものを探るための研究方法論であることが特徴の一つと考えられる。

また、清水（2009）は、従来主流だった古典的エスノグラフィーは、研究者がフィールドでの観察を記録し解釈することが中心であるのに対して、この研究方法論の場合、フィールドの出来事を映像で示し、そこで生活する人々にコメントしてもらうことで、エスノグラフィーの権限を彼（女）らにも与えていることを指摘する。中坪（2018）は、当該文化の成員の考えを描写するために、研究者がフィールドの出来事を撮影した映像を介して彼（女）らの見解を記述すること、その際、当該文化の成員だけでなく、フィールド内外の様々な人々の多声（Multi-vocal ≡異なる見方）を重ね合わせることで、民族誌的記述を紡ぎ出していることを指摘する。このように多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、映像を Cue（刺激媒体）として、フィールド内外の人々の異なる見識を引き出すための研究方法論であることが特徴の一つと考えられる。

1-2. 多様に援用される多声的ビジュアル・エスノグラフィー

上記の特徴を有する多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、今日では、国内外の研究者の注目を集め、フィールドに根ざした研究方法論として多様に援用されている。その際、研究方法論の呼称についても、例えば、国内では「多声的ビジュアル・エスノグラフィー」（野口，2007）、「映像を手がかりとした多声的な比較文化エスノグラフィー」（トービン，2006）など、欧米では“video-cued multivocal ethnography (VCE)”（Tobin, 2019; Ferri, 2007; Karshi & Allexsah-Snider, 2015; McManus, Payne, Lee, Sachdeva, Falkner, Colegrove & Adair, 2019; Xiao, 2018），“Tobin Method”（White 2010）などとも称されている。

研究方法論としての多声的ビジュアル・エスノグラフィーをめぐるのは、“Preschool in Three Cultures”のレビューに関する論文（Bjork, 2009）や、データ収集について論じた論文（Adair & Kurban, 2019）などはあるものの、国内外の研究者にどのように援用されているのかについて検討した研究は見当たらない。

1-3. 本研究の目的

本研究の目的は、多声的ビジュアル・エスノグラフィーが国内外でどのように援用されているのかを概観することで、研究方法論としての可能性と課題について検討することである。

本研究がこの点を検討することには、次の意義があると考えられる。第一に、多声的ビジュアル・エスノグラ

フィーがどのような研究を行う上で適しているのかを示すことができる。第二に、これから多声的ビジュアル・エスノグラフィーの援用を考えている初学者に向けて、研究を行うための有益な情報を提示することができる。

なお、呼称について本研究では、多声的ビジュアル・エスノグラフィーとする。

2. 研究方法

2-1. 文献収集の手順

本研究では、著書や学位論文などを除き、多声的ビジュアル・エスノグラフィーを用いた学術論文を対象に文献を収集した。その際、EBSCO (EBSCOhost)、ERIC (Educational Resources Information Center)、CiNii (国立情報学研究所)、中国知网のデータベースを用いた。

具体的には、英語文献の場合、“Tobin” “Multi-vocal Visual Ethnography” のキーワードを用いて Google Scholar で検索したところ52件がヒットした。日本語文献の場合、「映像を用いた多声的エスノグラフィー」「ビジュアルエスノグラフィー」「映像／エスノグラフィー」「多声的エスノグラフィー」のキーワードを用いて CiNii (国立情報学研究所) で検索したところ26件がヒットした。中国語文献の場合、「多重声音民族志」「用录像引发的多重解释比较民族志研究法」「多重解释比较民族志」のキーワードを用いて中国知网で検索したところ23件がヒットした。

これらの多くは、概ねここ10年程度に発表されたものであったことから、2010年頃以降で入手可能な文献を対象とした。また、トービンが開発した研究方法論であることを明示した（彼の論文が引用された）文献を対象とした。なお、本研究の目的に鑑みて、トービン自身が著者となっている文献は、レビューの対象から除外した。最終的に分析の対象とした文献は、英語10件、日本語10件、中国語3件、計23件である。

2-2. 収集した文献の分析視点

収集した文献について、Microsoft Excel を用いて、著者、出版年、文献タイトル、掲載雑誌名、研究目的、研究方法、分析方法、研究結果、課題と限界などを入力することで内容を把握するとともに、次の分析視点に基づいて検討した。

第一に、収集した文献は、何を明らかにしているのかという視点である。この点を精査するために、(1) 態度、行動様式、習慣など、外面化されていて可視化可能なもの（以下「見えるもの」と表記）を明らかにしているのか、(2) 価値観、信念、実践知など、内面

化されていて可視化が難しいもの（以下「見えないもの」と表記）を明らかにしているのか、(3) その両方を明らかにしているのかに区別して分類した。

第二に、収集した文献は、幾つもの国を対象としているのかという視点である。この点を精査するために、(1) トービンと同様に、複数の国を対象とした比較文化研究なのか、(2) 一カ国のみを対象とした研究なのかに区別して分類した。

第三に、収集した文献は、多声的ビジュアル・エスノグラフィーを行うにあたって、何を Cue（刺激媒体）としてフィールド内外の人々の語りを引き出しているのかという視点である。この点を精査するために、(1) トービンと同様に、映像を使用しているのか、(2) 映像以外のメディアを使用しているのか（その場合、メディアは何か）に区別して分類した。

第四に、収集した文献における Cue（刺激媒体）は、どのような内容なのかという視点である。この点を精査するために、(1) トービンと同様に、「典型的な一日」(typical day) を使用しているのか、(2) それとは異なる内容かに区別して分類した。

第五に、収集した文献は、どの学問分野で用いられているのかという視点である。この点を精査するために、(1) 文化人類学者のトービンが幼児教育学分野の研究を行ったのと同様に、文化人類学、幼児教育学、教育学分野なのか、(2) それとは異なる学問分野なのかに区別して分類した。

3. 結果と考察

上記の分析視点に基づいて共同研究者間で精査したところ、多様に援用される多声的ビジュアル・エスノグラフィーの具体について、次の点が見出された。

3-1. 「見えないもの」を捉える多声的ビジュアル・エスノグラフィー

収集した23件について、何を明らかにしているのかという視点で検討したところ、「見えるもの」のみを明らかにした研究は0件、「見えないもの」のみを明らかにした研究は13件（e.g. Liu, 2019; Campbell & Valauri, 2019）、「見えるもの」と「見えないもの」の両方を明らかにした研究は10件（e.g. Lamorey, 2017; Henward, Turituri & Tauaa, 2019）であった。このことから多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、フィールド内外の人々が「なんとなくそう感じる」というような心の中に秘められており言語化することが難しい感情、思考、価値観、信念など、「見えないもの」を捉えるために援用されていることが分かった。以下、「見えないもの」を捉えた研究について概観する。

砂上・秋田・増田・箕輪・中坪・安見（2015）は、幼稚園の片付け場面を対象に、保育者の実践知を明らかにする。戸外と室内で子どもたちが片付ける様子を映し出した映像をもとに、それを視聴した保育者の語りを収集することで、状況的で潜在的な特性を有する保育者の実践知を可視化している。

芦田・秋田・鈴木・門田・野口・小田（2006）は、日本と独国の就学前施設を対象に、子どもたちのまごど遊び、トランポリン遊び、彫刻遊びなどの映像をもとに、両国の保育者の保育観を比較する。その結果、両国とも子どもの主体性、自主性を尊重することに好意的であること、独国の保育者の場合、自己決定が重視されること、子どもたちの安全確保が前提にあること、伝統的な性役割に対する意識が強いことなどを明らかにしている。

Lamorey（2017）は、トルコと米国の幼児教育プログラムにおいて、家庭訪問者（home visitors）が子どもと保護者の家庭を訪問する様子を映し出した映像をもとに、両国における家庭訪問をめぐる文化的な価値観や信念の差異について検討する。トルコの場合、家庭訪問者はビジネススーツを着用して家庭訪問するのに対して、米国の場合、カジュアルな服装で子どもや保護者とかわっており、家庭訪問者としての役割をめぐる文化的差異を可視化している。

多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、先行研究でも暗黙の思考を可視化するツールとしての機能が指摘されており（e.g. Adair & Kurban 2019）、本研究の結果もこれを裏付けるものである。「見えないもの」を捉える研究を行う上で、多声的ビジュアル・エスノグラフィーが援用されていることが分かる。

3-2. 一つの国の異なる見識を捉える多声的ビジュアル・エスノグラフィー

収集した23件について、幾つもの国を対象としているのかという視点で検討したところ、複数の国を対象とした比較文化研究は9件（e.g. Nah & Waller, 2015）、一カ国のみを対象とした研究は14件（e.g. Karsli & Alleksaht-Snyder, 2015）であった。このことから多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、開発者のトービンが示した比較文化研究に留まらず、今日では一カ国のみを対象とした研究方法論としても援用されていることが分かった。以下、それぞれの研究について概観する。

複数の国を対象とした比較文化研究では、トルコと米国（Lamorey, 2017）、英国と韓国を対象とした研究（Nah & Waller, 2015）、米国、豪国、ニュージーランドを対象とした研究（McManus, Payne, Lee, Sachdeva, Falkner, Colegrove & Adair, 2019）など、

多岐に渡って行われていた。他方、一カ国のみを対象とした研究では、日本を対象とした研究（6本）（e.g. 香曾我部・秋田・伏見・奥山, 2008）、米国を対象とした研究（3本）（e.g. Henward, Turituri & Tauaa, 2019）、中国を対象とした研究（2本）（e.g. 朱, 2008）が主に行われていた。

一カ国のみを対象とした研究は、日本、米国、中国が中心であり、トービンが研究対象とした国と一致する。これはおそらく偶然ではなく、彼の研究方法論が三カ国においてインパクトを与えている可能性が考えられる。今日の多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、複数の国をまたがる比較文化研究としてだけでなく、一つの国の中で、態度、行動様式、習慣、価値観、信念、実践知などが異なる人々の見識を捉える研究方法論としても援用されていることが分かる。

3-3. 新たな Cue（刺激媒体）の援用が試みられる多声的ビジュアル・エスノグラフィー

収集した23件について、何を Cue（刺激媒体）としてフィールド内外の人々の語りを引き出しているのかという視点で検討したところ、映像を用いた研究が21件（e.g. McManus, Payne, Lee, Sachdeva, Falkner, Colegrove & Adair, 2019）、映像と写真を併用して用いた研究が1件（Nah & Waller, 2015）、Web サイトを用いた研究が1件（中坪・秋田・砂上・高木・辻谷・箕輪, 2018）であった。このことから多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、多くがトービンと同じように映像を Cue（刺激媒体）としていることが分かった。その理由として映像は、他のメディアよりも多くの情報が含まれること、視聴者を引き付ける要素があること、分かりやすいこと、印象に残ること、五感を刺激することなどが考えられる。映像は、フィールド内外の様々な人々の多声を引き出す Cue（刺激媒体）としては、最も適していると言えよう。そのような中、以下では Web サイトを用いた研究について概観する。

中坪・秋田・砂上・高木・辻谷・箕輪（2018）は、幼稚園長が自園の Web サイトに掲げる「こどものつぶやき」をもとに、日本と米国の保育者の語りを収集することで、日米の幼児教育に潜在する社会・文化的習慣や認識の差異を明らかにする。たとえ映像よりも限られた情報の Web サイトであっても、「こどものつぶやき」を掲げることの意味をめぐって、日米の保育者の異なる見解を浮き彫りにしており、映像以外の新たな Cue（刺激媒体）の援用が試みられている。

多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、映像を中心的な Cue（刺激媒体）としながらも、それ以外の新たな援用も見られることから、今後は、写真や Web サイトなどの使用が、映像と比べてどのように異なる

語りを引き出すのかの検討が待たれるところである。

3-4. 多様な内容の Cue（刺激媒体）で構成される多声的ビジュアル・エスノグラフィー

収集した23件について、使用される Cue（刺激媒体）はどのような内容なのかという視点で検討したところ、トービンと同様に、就学前施設における「典型的な一日」（typical day）の映像を Cue（刺激媒体）とした研究が2件（e.g. Liu, 2019）、それとは異なる内容を Cue（刺激媒体）とした研究が20件（e.g. Campbell & Valauri, 2019）、内容の詳細が記載されていない研究が1件（黄・趙・オル加, 2019）であった。このことから多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、「典型的な一日」（typical day）に留まらず、多様な内容で構成される Cue（刺激媒体）が用いられていることが分かった。以下、多様な内容の Cue（刺激媒体）に関する幾つかの研究を概観する。

Karshi & Alexsaht-Snider（2015）は、就学前施設を対象に、子どもたちが算数に関する遊びに参加している様子、パズルを完成させたり、小さな立方体を使って遊んだり、材料を並べ替えたり、算数カードに取り組んだりしている映像を Cue（刺激媒体）として、幼児期における算数的な活動の意味を保護者がどのように捉えているのかを明らかにする。

König & Aalsvoort（2009）は、蘭国と独国の保育者を対象に、両国の幼稚園における自由遊びなどの映像に加えて、芦田・秋田・鈴木・門田・野口・小田（2006）の研究で使用された、日本の子どもたちのままごと遊びやトランポリン遊びの映像を Cue（刺激媒体）として用いる。蘭国と独国の文化や社会システムが類似することから、それとは異なる文化である日本の映像を介して、両国の保育者の語りを引き出している点が特徴的である。

Aalsvoort, Prakke, König & Goorhuis（2010）は、蘭国と独国の保育者と学生を対象として、König & Aalsvoort（2009）と同様の理由で、蘭国と独国に加えて日本の幼稚園における保育者と子どもの映像を Cue（刺激媒体）の内容として使用している。

安達・サトウ・日高（2011）は、筋萎縮性側索硬化症（ALS: Amyotrophic Lateral Sclerosis）患者のまばたきや些細な表情の変化と、それに応答するヘルパーや看護師とのコミュニケーションの様子に関する内容の映像を使用している。

他にも Nah & Waller（2015）は、英国と韓国の就学前施設において典型的な野外遊びの映像を、楊川（2014）は、4歳児の子どもが懲罰を受ける場面の映像を、山田・砂上（2020）は、子どもが行う「イヤイヤ」「ダメ」に対する保育者の対応に関する映像を、それ

ぞれ Cue (刺激媒体) として使用している。また、既述したように、「こどものつぶやき」が記された Web サイトを Cue (刺激媒体) とする研究もある (中坪・秋田・砂上・高木・辻谷・箕輪, 2018)。

多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、今日では多様な内容の Cue (刺激媒体) が援用されており、いずれも見るとして印象的であり、感情を喚起するものであることが分かる。

3-5. 医学や看護学分野でも援用される多声的ビジュアル・エスノグラフィー

収集した23件について、どの学問分野で用いられているのかという視点で検討したところ、文化人類学、幼児教育学、教育学分野の研究が21件 (e.g. Nah & Waller, 2015)、それとは異なる学問分野の研究が2件であった。具体的には、医学や看護学分野で援用されていた (朱, 2008; 安達・サトウ・日高, 2011)。以下、該当する研究を概観する。

朱 (2008) は、ベテラン医師、新任医師、医大生、患者を対象に、彼 (女) らが今日の医療技術をどのように捉えているのかを検討する。その結果、技術の急速な発展に対する驚きや、診察過程の繁雑さなどから人が弱くなったと感じるなど、医療技術の発展を必ずしも肯定的な印象のみで捉えているわけではないことを明らかにする。

安達・サトウ・日高 (2011) は、筋萎縮性側索硬化症 (ALS) 患者、ヘルパー、看護師を対象に、文字盤等のコミュニケーションエイドが用いられない場面において、患者と周囲の非患者との間に生じるコミュニケーションの実態を検討する。

多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、文化人類学者のトービンが就学前施設を対象として行った研究方法論であることから、文化人類学、幼児教育学、教育学分野の研究で数多く援用されていることが改めて示された。その一方で、医学や看護学分野で援用されていることは興味深い。今後、多様な学問分野への発展を予見するものである。

4. 総合考察

多様に援用される多声的ビジュアル・エスノグラフィーの具体を概観したところ、次の5点が明らかになった。(1) 価値観、信念、実践知など「見えないもの」を捉える研究方法論として援用されていること、(2) 複数の国をまたがる比較文化研究としてだけでなく、一つの国の中で異なる見識を捉える研究方法論として援用されていること、(3) 映像を中心的な Cue (刺激媒体) としながらも、それ以外の新たな援用も試みら

れていること、(4) 「典型的な一日」(typical day) の映像だけでなく、多様な内容の Cue (刺激媒体) で構成されていること、(5) 文化人類学、幼児教育学、教育学分野だけでなく、医学や看護学分野でも援用されていることである。

以上の結果を踏まえ、研究方法論としての多声的ビジュアル・エスノグラフィーの可能性と課題について検討する。

4-1. 多声的ビジュアル・エスノグラフィーの可能性

多声的ビジュアル・エスノグラフィーの可能性として、次の点を挙げることができる。第一に、たとえ個人研究であっても、複数の国をまたがる比較文化研究や、一つの国の中で異なる見識を捉える研究が可能となることである。多声的ビジュアル・エスノグラフィーでは、Cue (刺激媒体) を介して様々な人々の態度、行動様式、習慣、価値観、信念、実践知などを捉えて記述する。そこでは、何を Cue (刺激媒体) とし、どのような人々の語りを収集しようとするのが定めれば、個人であっても多岐に渡るデータ収集が可能となる。本研究では触れることができないが、大学院生の修士論文や博士論文作成における研究方法論としての使用も広がっている点は注目に値する。

第二に、古典的エスノグラフィーとは異なり、一定の期間をかけてフィールドワークを行い、当該文化の成員と寝食を共にしなくても、民族誌的記述が可能となることである。確かにトービンの研究では、Cue (刺激媒体) の作成のためにフィールドワークが行われ、膨大な映像データが収集されている。他方、多様な内容の Cue (刺激媒体) で構成される研究の中には、テレビ番組や市販の映像を使用した研究 (e.g. 山田・砂上, 2020)、幼稚園の Web サイトを使用した研究 (中坪・秋田・砂上・高木・辻谷・箕輪, 2018) など、研究者のフィールドワークに基づかない研究も散見される。多声的ビジュアル・エスノグラフィーが多様に援用される背景には、この点が影響していることが考えられる。

第三に、医学や看護学分野でも援用されていることから分かる通り、今後は、より多様な学問分野への発展可能性があることである。(1) 個人研究においても使用できること、(2) 必ずしもフィールドワークを必要としないこと、(3) 「見えないもの」を捉えるための優れた研究方法論の一つであること、(4) 一つの国の中で異なる見識を捉える研究方法論としても用いられることなどの特徴を踏まえると、多声的ビジュアル・エスノグラフィーは、その援用において発展可能性に満ちていることが分かる。

4-2. 多声的ビジュアル・エスノグラフィーの課題

多声的ビジュアル・エスノグラフィーの課題として、次の点を挙げることができる。第一に、この研究方法論では、例えば、保育者が子どもに対応する様子や、筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者にヘルパーや看護師が応答する様子など、ある文化に属する人々の態度、行動様式、習慣などを映し出した映像をもとに、フィールド内外の人々の語りを収集する。そこでは、特にフィールド外の人々が映像を視聴する際、場合によっては、映像中の人々の言動に過度に影響を受け、それを模範のように捉えてしまい、結果として、自らの言動を改めようとするのが希に生じる。もちろん、映像の視聴を契機に、自らの言動を反省し改善することも大切である。とは言え、自らの態度、行動様式、習慣は、その人が属する文化に基づいたものであり、それを否定する必要はまったくない。多声的ビジュアル・エスノグラフィーを用いる上で研究者は、この点を頭の隅に置いておきたい。

第二に、既述した通り、使用される Cue（刺激媒体）の内容は、必ずしも一定の期間をかけたフィールドワークに基づくものではなく、市販の映像を使用したり、そこではナレーションや字幕スーパーが含まれたりなど、研究者が視聴する側を価値付けたり、方向付けたりするような状況が伴うことも少なくない。また、たとえナレーションや字幕スーパーがなくとも、研究者の関心に基づいた特定の場面が抽出され、用いられることとなる。Cue（刺激媒体）の内容が研究結果に与える影響が大きいことを踏まえると、多声的ビジュアル・エスノグラフィーを用いる上で研究者は、Cue（刺激媒体）の内容、その場面を抽出した経緯、ナレーションや字幕スーパーを用いる（用いない）理由などについて自覚し、説明に留意する必要がある。

4-3. 本研究の限界と課題

最後に、本研究の限界と課題を提示する。第一に、本研究では、既述した5つの分析視点に基づいて、多様に援用される多声的ビジュアル・エスノグラフィーの具体を概観した。他方で、収集した文献は、例えば、どれほどのサンプルサイズで行われた研究なのか、フィールド内外の人々と言うとき、どれくらい多様な人々の語りに耳を傾けているのかなどの分析視点で概観することもできた。この点は、今後の課題として掲げておきたい。

第二に、収集した文献を精査する際、Cue（刺激媒体）の作成過程や内容、インタビューの形態や方法、データ分析の方法など、筆者らが知りたい情報が必ずしも十分に明記されない文献も少なくない。本研究がそうした限られた情報の中で分析を試みたことについ

ては、必ずと限界があることも自覚しておきたい。

【注】

以下、収集した23件の文献をすべて掲げる。その際、本文中で引用していないものも含まれるため、引用・参考文献と表記する。

【引用・参考文献】

- 安達俊祐・サトウタツヤ・日高友郎(2011)「ビジュアル・エスノグラフィーを用いたALS患者のコミュニケーションの理解」『立命館人間科学研究』第22号 73-86頁。
- A. König., & G. M. van der Aalsvoort (2009). Attitudes of Dutch and German preschool teachers towards professional childcare: a cultural comparison. *Early Years*, 29, 249-260.
- Adair, J. K., & Kurban, F. (2019). Video-Cued Ethnographic Data Collection as a Tool Toward Participant Voice. *Anthropology & Education Quarterly*, 50, 313-332.
- 芦田宏・秋田喜代美・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・小田豊 (2006) 「多声的エスノグラフィー法を用いた日独保育者の保育観の比較検討－語頻度に着目した実践知の明示化を通して－」『教育方法学研究』第32巻 107-117頁。
- Bjork, C. (2009). Preschool in Three Cultures Revisited. *Comparative Education Review*, 53, 259-283.
- Burke, S. R., & Duncan, J. (2015). *Bodies as sites of cultural reflection in early childhood education*. Taylor & Francis. 七木田敦・中坪史典監訳(2017)『文化を映し出す子どもの身体－文化人類学からみた日本とニュージーランドの幼児教育－』福村出版
- Campbell, K. H., & Valauri, A. (2019). Our Voices Matter: Using Video-Cued Ethnography to Facilitate a Conversation about Race between Parents of Color and Preservice Teachers. *Anthropology & Education Quarterly*, 50, 333-339.
- Ferri, P. (2007). Children and Computers: what they know, what they do. Indire-OECD Expert Meeting on the New Millennium Learners. from <http://www.oecd.org/education/ceri/38360913.pdf>
- G. Van der Aalsvoort., Prakke, B., A. König., & Goorhuis, S. (2010). Preschool teachers' and students' attitudes towards playful preschool

- activities: a cross-cultural comparison between Germany and the Netherlands. *International Journal of Early Years Education*, 18, 349-363.
- 林安希子 (2019) 『幼児教育のエスノグラフィー-日本文化・社会のなかで育ちゆく子どもたち-』 明石書店
- Hayashi, A., & Tobin, J. (2015). *Teaching Embodied: Cultural Practice in Japanese Preschools*. University of Chicago Press.
- Henward, A. S., Turituri, R., & Tauaa, M. (2019). "We Need Both": Combining Video-Cued Multivocal Ethnographic Methods and Traditional Fieldwork in Samoan Head Start Policy Research. *Anthropology & Education Quarterly*, 50, 367-373.
- 黄进・赵亚莉・奥尔加杰瑞特 (2019) 〈中美幼儿园游戏空间的比较研究-以两所高校附属幼儿园的活动室为例〉《比较教育研究》348: 92-99
- Karsli, E., & Allexsaht-Snider, M. (2015). Video-cued parental dialogs: A promising venue for exploring early childhood mathematics. *Education and Science*, 40, 217-240.
- 笠原広一 (2012) 「芸術教育における経験の質的研究の可能性-こどもの創作劇ワークショップにおける多声的ビジュアル・エスノグラフィー-」『京都造形芸術大学紀要』第16号 110-129頁.
- 岸磨貴子 (2017) 「授業研究におけるビジュアルエスノグラフィーの実践: 中国人教員が日本の授業から学んだ授業改善の問い」『日本教育工学会研究報告集』第17巻 第3号 99-106頁.
- 香曾我部琢・秋田房子・伏見範子・奥山優佳 (2008) 「異年齢の幼児の互惠性を育むために必要とされる保育者の資質-ビジュアル・エスノグラフィーによる保育者の暗黙知の意識化を促す半構造化面接より-」『現代教育学研究紀要』第1号 53-65頁.
- Lamorey, S. (2017). Home Visiting in Two Cultures. *Journal of Research in Childhood Education*, 31, 71-83.
- Liu, C. (2019). An Emic Approach to Ethics: Doing Video-Cued Ethnography with Children in a Chinese Preschool. *Anthropology & Education Quarterly*, 50, 361-366.
- McManus, E. M., Payne, K., Lee, S., Sachdeva, S., Falkner, A., Colegrove, K., & Adair, J. (2019). Expanding Video-Cued Multivocal Ethnography for Activist Research in the Civic Action and Young Children Study. *Anthropology & Education Quarterly*, 50, 348-355.
- Nah, K. O., & Waller, T. (2015). Outdoor play in preschools in England and South Korea: learning from polyvocal methods. *Early Child Development and Care*, 185, 2010-2025.
- 中坪史典 (2018) 「映像や写真を介して保育者の多声的な語りを収集する-文化を反映する保育実践を描き出す試み-」『日本教育方法学会第21回研究集会報告集』12-21頁.
- 中坪史典・秋田喜代美・砂上史子・高木恭子・辻谷真知子・箕輪潤子 (2018) 「日米の保育者は日本の幼稚園 Web サイトをどう見るのか? - 『子どものつぶやき』をめぐる語りに潜在する社会・文化的習慣や認識-」『チャイルドサイエンス』第16巻 47-51頁.
- 野口隆子 (2007) 「第13章 多声的ビジュアルエスノグラフィーによる教師の思考と信念研究」秋田喜代美・能智正博監修『事例から学ぶはじめての質的研究法教育・学習編』東京図書 296-317頁.
- 野口隆子・小田豊・芦田宏・門田理世・鈴木正敏・秋田喜代美 (2005) 「保育者の持つ“良い保育者”イメージに関するビジュアルエスノグラフィー」『質的心理学研究』第4号 152-164頁.
- 野澤祥子・井庭崇・天野美和子・若林陽子・宮田まり子・秋田喜代美 (2018) 「保育者の実践知を可視化・共有化する方法としての『パターン・ランゲージ』の可能性」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第57号 419-449頁.
- 大橋香奈・加藤文俊 (2016) 「トランスナショナルな生活世界を生きる個の理解を目指して-映像民族誌的方法の実践的検討-」『生活学論叢』第30号 15-28頁.
- 清水秀規 (2009) 「マルチボイカル・ビジュアルエスノグラフィー-日, 米, 香港における比較青年研究の例-」箕浦康子編『フィールドワークの技法と実際 II 分析・解釈編』ミネルヴァ書房 126-143頁.
- 鈴木正敏・秋田喜代美・芦田宏・門田理世・野口隆子・小田豊 (2008) 「ビデオ再生刺激法を用いた幼稚園・小学校教師の発達観の比較研究」『乳幼児教育学研究』第17号 117-126頁.
- 砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・中坪史典・安見克夫 (2012) 「幼稚園の片付けにおける実践知: 戸外と室内の片付け場面に対する語りの比較」『発達心理学研究』第23巻 第3号 252-263頁.
- 砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・中坪史典・安見克夫 (2015) 「幼稚園4歳児クラスの片付けにおける保育者の実践知-時期の異なる映像記録に対する保育者の語りの分析-」『日本家政学会誌』第66巻 第1号 8-18頁.

- トービンジョセフ (2006) 「ビデオを手がかりにした比較文化エスノグラフィー (A. ビデオ記録のあり方を探る, III. プロジェクト研究会)」『ネットワーク: 年報』第8巻 47-56頁.
- Tobin, J. (1989). Visual anthropology and multivocal ethnography: A dialogical approach to Japanese preschool class size. *Dialectical Anthropology*, 13, 173-187.
- Tobin, J. (2019). Going Deeper in Video-Cued Multivocal Ethnographies. *Anthropology & Education Quarterly*, 50, 356-360.
- Tobin, J., Hsueh, Y., & Karasawa, M. (2009). *Preschool in Three Cultures Revisited: China, Japan, and the United States*. The University of Chicago.
- Tobin, J., Wu, D., & Davidson, D. (1989). *Preschool in Three Cultures: Japan, China, and the United States*. New Haven: Yale University Press.
- White, M. (2010). Book Review: *Preschool in Three Cultures Revisited: China, Japan and the United States*. *Pacific Affairs*, 83, 744-745.
- Xiao, S. (2018). More than Data: A Multivocal Inquiry into Video-Based Research on Learning and Teaching. *ECNU Review of Education*, 1, 23-35.
- 山田千愛・砂上史子 (2020) 「1・2歳児の反抗・自己主張における養育者の対応と意識-多声的エスノグラフィーの手法を参照した語りの分析-」『保育学研究』第58巻 第1号 43-55頁.
- 杨川 (2014) 〈多重声音解读幼儿教育中的惩罚〉《长春教育学院学报》5: 49-50
- 朱克军 (2008) 〈科技哲学与人类学交叉领域的新探索—多重声音解读技术奴役困境〉《第二届中国科技哲学及交叉学科研究生论坛论文集 (硕士卷)》350-354